

ボランティア学習の効果に学習集団規模が与える影響

林 幸 克

(文教大学付属教育研究所客員研究員)

A Study on Effects of Learning-Group-Size for Volunteer-Learning

HAYASHI YUKIYOSHI

(Guest Researcher of Institute of Education, Bunkyo University)

要 旨

2002年5月に高校1年生1044人を対象に、ボランティア学習に関する質問紙調査を行った。学習に適切であると考えられる集団規模別(6分類)に、ボランティアの多様性の理解、解説技能を伴う指導性、コミュニケーションの自信、自己実現への意識、国際性の5つの側面について比較検討した。その結果、「31人以上」の学習集団の得点がすべての側面において得点が最も高く、男女別でも同様の傾向にあることが明らかになった。

1 はじめに

総務省が実施した『平成13年社会生活基本調査』の結果を見ると、過去1年間に「ボランティア活動」を行った人は約3263万人で、10歳以上人口に占める割合(行動者率)は28.9%となっている。前回の平成8年の調査結果と比較すると、10歳代前半から20歳代前半の層で行動者率が大幅に上昇していることが特徴として挙げられる。

この変化の背景について考えてみると、教育改革国民会議の報告(2000(平成12)年)やそれを受けて文部科学省から発表された「21世紀教育新生プラン」(2001(平成13)年)、学校教育法・社会教育法の一部改正(2001(平成13)年)等といった一連の動きの影響が、少なからずあったのではないかと思われる。

る。

それらの中には、“ボランティア活動”の文言が頻繁に見られる。今日のボランティア活動に関する学習プログラムを概観すると、学校教育、社会教育はもちろん、民間機関やNPOなども主体になって、幅広く様々な学習の場・機会が提供されていることがわかる。

それでは、その中の学校教育におけるボランティア活動に関する学習は、どのような方法で進められているのであろうか。「総合的な学習の時間」の導入などに伴い、子どもの学習方法、教師の学習支援の在り方に様々な工夫が見られるようになっている。その一方で、学習内容等に関わりなく、旧態依然として、教師が集団に対して講義(一斉授業)を行っているという状況も見受けられる¹。

ここでは、学習場面における集団に着目してみたい。子どもが学校において体験するフォーマルな学習集団としては、学年、学級、学級における班・グループ、部・クラブ単位の集団などが挙げられよう。それらの学習集団は、子どもの発達段階や学習の内容・レベル・目的等に応じて、規模や編成の仕方は変わって然るべきである。ただ、いずれの学習集団においても、学習効果を高めるために、子どもが自主的、自治的な集団活動を展開することができるような配慮が求められるものと思われる。集団があれば、それをまとめるリーダー、そして、そのリーダーに従うフォロアーという役割分担が必ずと生まれるであろう。そのリーダーに関して、今日、リーダーシップは学習可能であるという認識に立ち、PM理論に基づく感受性訓練プログラムが開発されている⁶。そうしたプログラムなどを通して、子どものために、集団内における様々な役割を体験する機会を提供することは、リーダーとしての資質や自信を獲得させるために重要なことである。そのための体験をより効率的にするには、先述したような集団での学習活動の場を意図的に設け、それぞれの学習集団の規模が、子どもの学びに対していかなる影響を与えるのか、その詳細を把握する必要があると思われる。

本研究では、学習効果に学習集団規模が与える影響を考えるにあたり、ボランティア学習を取り上げる⁷。そして、その学習をより有効に展開させていくための学習集団の規模とその在り方について、調査結果をもとに実証的に考察する。

2 調査方法・内容

2002年5月に、埼玉県⁸の県立高等学校3校の1年生1044人を対象に質問紙調査を実施した。調査票の配布・回収は各校の教頭先生を窓口⁹に、クラス担任経由で行った。本稿では、有効回答者929人(有効回収率89.0%)のデー

タを分析対象とした。

調査内容として、まず、ボランティア学習を進める上で適していると思う人数の記入を求めた。それから、林・谷井の開発した尺度¹⁰を用いて、ボランティア研修の効果を表す29項目について5件法で回答を求めた。データ入力に関して、「きわめてあてはまる」を4点、「かなりあてはまる」を3点、「わりとあてはまる」を2点、「少しあてはまる」を1点、「あてはまらない」を0点として得点化した。

林・谷井の尺度に基づき、(1)ボランティアの多様性の理解、(2)解説技能を伴う指導性、(3)コミュニケーションの自信、(4)自己実現への意識、(5)国際性の5つの側面について、それぞれの学習効果を高めることに適した集団規模とその在り方を検討した。

3 結果と考察

(0)全体的な傾向

まず最初に、ボランティア研修の効果に関する項目について、回答者全体の意識傾向を見てみよう(表1参照)。

5つの側面のうち、(3)「コミュニケーションの自信」(1.90点)の得点が最も高く、以下、(4)「自己実現への意識」(1.81点)、(5)「国際性」(1.49点)、(2)「解説技能を伴う指導性」(1.12点)、(1)「ボランティアの多様性の理解」(0.61点)の順で得点が高かった。

この結果は、林・谷井の調査結果¹¹とほぼ同様であった。学習をしていく過程で他者との関わりが生まれるボランティア学習にとって、コミュニケーション能力は重要な要素であると考えられよう。ボランティア活動による「学びの効果」に関する調査結果¹²をみると、他者理解力と集団調整力において顕著な効果が示されている。この2つの力の向上にも、「コミュニケーションの自信」というものが大きく関わってくるのではないかと思われる。

また、集団規模別の得点では、「31人以上」

において、(1)「ボランティアの多様性の理解」(0.78点)、(2)「解説技能を伴う指導性」(1.46点)、(3)「コミュニケーションの自信」(2.16点)、(4)「自己実現への意識」(2.26点)、(5)「国際性」(1.59点)のいずれについても、他の集団規模よりも高い得点を示した。男女別にみても、女子の(5)「国際性」を除けば、

同様の結果が得られた。

この「31人以上」という集団はクラスの規模とほぼ同じである。現在の中学校や高等学校におけるボランティア学習の実施形態として、クラス単位を中心にした取り組みの多いことが、この結果に反映されているのではないと思われる。

表1 学習集団規模別「ボランティア研修の効果」

(4点満点)

		【 全体 】						
		合計	1～3人	4～5人	6～10人	11～20人	21～30人	31人以上
		(n=929)	(n=107)	(n=371)	(n=297)	(n=81)	(n=33)	(n=40)
1. ボランティアの多様性の理解	Mean (SD)	0.61 (0.63)	0.70 (0.64)	0.61 (0.63)	0.58 (0.57)	0.58 (0.76)	0.43 (0.50)	0.78 (0.83)
2. 解説技能を伴う指導性	Mean (SD)	1.12 (0.91)	1.16 (1.00)	1.16 (0.88)	1.09 (0.90)	1.01 (0.94)	0.73 (0.68)	1.46 (0.91)
3. コミュニケーションの自信	Mean (SD)	1.90 (1.01)	2.01 (1.03)	1.93 (0.99)	1.86 (1.00)	1.81 (1.04)	1.72 (1.08)	2.16 (1.04)
4. 自己実現への意識	Mean (SD)	1.81 (0.87)	1.76 (0.94)	1.81 (0.84)	1.79 (0.85)	1.77 (0.88)	1.65 (0.85)	2.26 (0.73)
5. 国際性	Mean (SD)	1.49 (1.18)	1.50 (1.21)	1.47 (1.16)	1.52 (1.20)	1.48 (1.20)	1.30 (1.16)	1.59 (1.22)
		【 男子 】						
		合計	1～3人	4～5人	6～10人	11～20人	21～30人	31人以上
		(n=473)	(n=56)	(n=211)	(n=136)	(n=34)	(n=15)	(n=21)
1. ボランティアの多様性の理解	Mean (SD)	0.58 (0.64)	0.63 (0.62)	0.63 (0.66)	0.54 (0.59)	0.38 (0.47)	0.43 (0.51)	0.77 (0.89)
2. 解説技能を伴う指導性	Mean (SD)	1.13 (0.91)	1.07 (1.08)	1.22 (0.89)	1.01 (0.84)	0.96 (0.91)	0.68 (0.67)	1.43 (0.98)
3. コミュニケーションの自信	Mean (SD)	1.80 (1.04)	1.90 (1.11)	1.88 (1.00)	1.64 (1.02)	1.54 (1.04)	1.33 (1.07)	2.17 (0.97)
4. 自己実現への意識	Mean (SD)	1.79 (0.91)	1.73 (1.04)	1.81 (0.87)	1.72 (0.89)	1.75 (0.95)	1.27 (0.90)	2.21 (0.65)
5. 国際性	Mean (SD)	1.32 (1.15)	1.29 (1.21)	1.34 (1.17)	1.25 (1.13)	1.19 (1.10)	1.10 (1.14)	1.62 (1.33)
		【 女子 】						
		合計	1～3人	4～5人	6～10人	11～20人	21～30人	31人以上
		(n=456)	(n=51)	(n=160)	(n=161)	(n=47)	(n=18)	(n=19)
1. ボランティアの多様性の理解	Mean (SD)	0.63 (0.62)	0.78 (0.66)	0.59 (0.58)	0.62 (0.56)	0.72 (0.89)	0.44 (0.51)	0.80 (0.78)
2. 解説技能を伴う指導性	Mean (SD)	1.11 (0.90)	1.25 (0.91)	1.08 (0.86)	1.15 (0.94)	1.05 (0.97)	0.76 (0.72)	1.49 (0.85)
3. コミュニケーションの自信	Mean (SD)	2.03 (0.98)	2.13 (0.94)	1.99 (0.96)	2.04 (0.95)	2.01 (1.00)	2.06 (1.01)	2.14 (1.15)
4. 自己実現への意識	Mean (SD)	1.83 (0.82)	1.79 (0.82)	1.81 (0.80)	1.84 (0.81)	1.77 (0.84)	1.96 (0.68)	2.32 (0.83)
5. 国際性	Mean (SD)	1.66 (1.19)	1.73 (1.19)	1.64 (1.12)	1.74 (1.21)	1.69 (1.24)	1.47 (1.18)	1.56 (1.12)

以下では、5つの側面それぞれについて、分析を進めていく。

(1) ボランティアの多様性の理解 (表1, 図1参照)

男女とも、「31人以上」の得点が一番高く(男子0.77点, 女子0.80点), 「1~3人」(男子0.63点, 女子0.78点)がそれに続いた。

他方, 得点が最も低かったものは, 男子では「11~20人」(0.38点), 女子では「21~30人」(0.44点)であった。それから, 「11~20人」において, 両者の得点の開きが一番大きく(0.34点差), 女子の方が高い得点(0.72点)を示した。

この結果から, 「ボランティアの多様性の理解」に関して, その理解を促すには, 「31人以上」というクラス規模での学習が, もしくは, 「1~3人」という小集団での学習が有効であることがうかがえる。

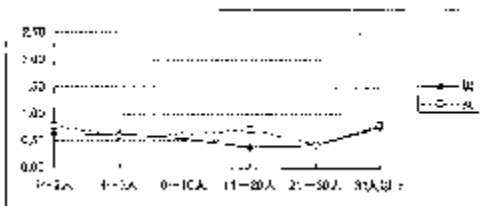


図1 男女別学習集団規模別「ボランティアの多様性の理解」

(2) 解説技能を伴う指導性 (表1, 図2参照)

「31人以上」が, 男女ともに最も高い得点であった(男子1.43点, 女子1.49点)。また, 逆に, 「21~30人」では, 両者とも一番低い得点を示した(男子0.68点, 女子0.76点)。なお, 他の集団規模で大きな差が認められることはなかった。

「31人以上」と「21~30人」という2つの集団規模について, 得点の示し方が大きく異なることから, 高校生にとって, 「解説技能を伴う指導性」を伸ばすには, 学習集団として「30人」という規模がポイントになるのかもしれない。

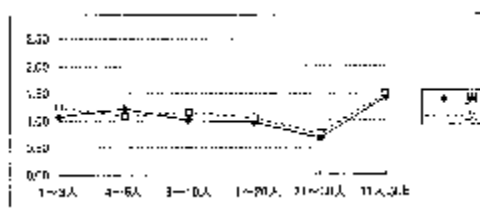


図2 男女別学習集団規模別「解説技能を伴う指導性」

(3) コミュニケーションの自信 (表1, 図3参照)

男子でも女子でも, 「31人以上」の得点が一番高かった(男子2.17点, 女子2.14点)。また, 得点の最も低い項目をみると, 男子では「21~30人」(1.33点), 女子では「4~5人」(1.99点)であった。女子に関しては, どの集団規模においても大きな得点差はなかったが, 男子では, 「6~10人」, 「11~20人」, 「21~30人」と集団規模が大きくなるに伴い得点が減少傾向にあり, 女子との得点差も開いていった。

すなわち, 女子は学習集団の規模の大小に関わらず「コミュニケーションの自信」を高めることは可能であるが, 男子については, 「ボランティアの多様性の理解」と同様, 「31人以上」という比較的大きな規模が, 「1~3人」というより小さい学習集団が適切であると思われる。

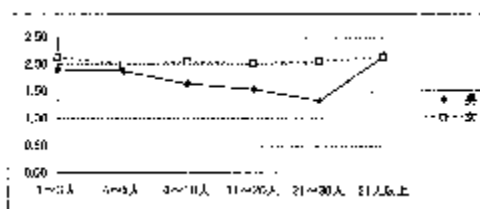


図3 男女別学習集団規模別「コミュニケーションの自信」

(4) 自己実現への意識 (表1, 図4参照)

「31人以上」の得点が, 男女とも最も高かった(男子2.21点, 女子2.32点)。その一方, 男子では「21~30人」の得点(1.27点)が一番低く, 女子は「11~20人」の得点(1.77点)が最も低かった。また, 「21~30人」の集団規模で両者に大きな得点差(0.69点差)が見

られた。

「21～30人」という集団規模に関して、男子の得点は最も低かった一方で、女子では、2番目に高かった。このことから、「解説技能を伴う指導性」のところで触れたが、高校生にとっての、“30人”を境とした集団規模の可能性や限界を、今後明らかにしていく必要があるように思われる。

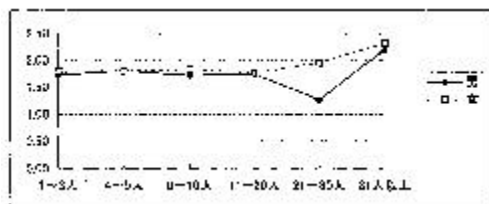


図4 男女別学習集団規模別「自己実現への意識」

(5)国際性(表1, 図5参照)

男子では「31人以上」(1.62点)の得点が最も高く、女子では「6～10人」(1.74点)の得点が一番高かった。他方、得点が最も低かった項目をみると、男子、女子ともに「21～30人」(男子1.10点、女子1.47点)であった。それから、「31人以上」を除けば、どの集団規模においても、0.30～0.50点程度、女子の方が得点が高かった。

この結果から、「31人以上」という学習集団になれば、「国際性」を高めるのに、男女差はかなり小さくなるが、それ以下の小集団にすれば、女子の学習効果は維持、もしくは高まる一方で、男子は、その逆の結果を招く可能性があることがわかった。

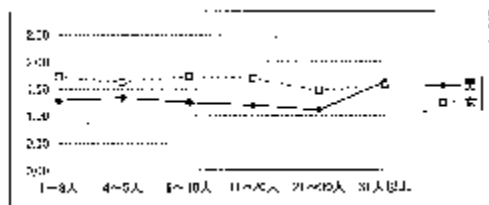


図5 男女別学習集団規模別「国際性」

4 おわりに

高校生にとって、「31人以上」という集団がボランティア学習に取り組みやすい規模であることがわかった。肯定的な解釈をすれば、大人数で取り組むことによって、ボランティア学習が大きく広がる可能性があると考えられよう。他方、否定的にみれば、高校生は、自分から積極的・自主的に取り組まなくても、何となく学習が進行しがちな「31人以上」の集団を希望していると捉えることができるのではないだろうか。

「コミュニケーションの自信」を高めることにつながるという意味では、活発に相互の意見交換ができるバズ学習やワークショップなどの学習形態がある。そこでしばしば用いられる「4～5人」に相当する集団での学習が必要になるケースも出てくると思われる。また、集団をまとめるという経験、すなわち、リーダーシップの発揮が求められる「6～10人」の中間集団⁷での活動経験を積ませることも重要になると考えられる。

さらに、教師をはじめとした、ボランティア学習を支援する側は、学習集団の編成に十分留意する必要がある。具体的には、ホームルーム活動の中などでよく用いられる班・グループ規模の集団での活動の場を意図的に設けることが望まれるのではないかとと思われる。それと同時に、その学習集団に対する関わり方について、子どもの気づきや学びを促すために、教師などには、ファシリテーターとしての素養が、今後より一層求められるようになるであろう。

【注記・引用文献】

- (1)伊藤安浩「教師文化・学校文化の日米比較」、稲垣忠彦・久富善之編『日本の教師文化』東京大学出版会、1994、pp.140-156
- (2)岸本弘・柴田義松・渡部洋・無藤隆・山本政人編『教育心理学用語辞典』学文社、1994、p.232

(3) ボランティア学習は、その活動過程において、大抵の場合は他者と関わる機会がある。また、学校教育においてボランティア学習に取り組む際には、班・グループで活動することが多く見られる。そのため、他者との相互作用や集団活動を通じた学びに着目して考察を進める本研究には、ボランティア学習が適当であると判断した。なお、ボランティア学習等の用語の定義については、次の文献を参照されたい。

林幸克「高校生のボランティア学習の効果的な展開に関する検討 - 高校入学までの体験に基づく考察 - 」『国立オリンピック記

念青少年総合センター研究紀要』第3号，2003，pp.1-12

(4) 林幸克・谷井淳一「青少年教育施設におけるボランティア研修会の効果に関する検討」『国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要』創刊号，2001，pp.9-19

(5) 前掲(4)

(6) 小澤巨「ボランティア文化の国際比較」，小澤巨編著『ボランティアの文化社会学』世界思想社，2001，pp.209-236

(7) 明石要一『戦後の子ども観を見直す』明治図書，1995，pp.88-96